舫い浜に生きる

37

修理を終えた中谷地俊夫さん（左）の小型漁船の最終点検をする浜名克之さん（中央）と前川良三さん＝釜石市平田

「1隻でも多く、船を海に戻したい」。釜石市平田の漁業兼船舶修理業浜名克之さん（50）は、平田漁港の一角で小型漁船の修復作業に励む。船外機（エンジン）の修理・販売を行う前川良三さん（72）とタッグを組み、地元漁業者の復興を支える。

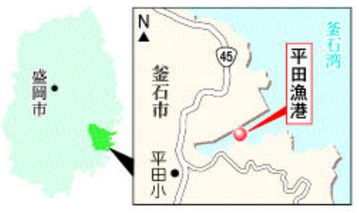
浜名さんは12年以上前から修理業を営んできたが、津波で漁港にあった作業小屋と工具が流され引退も考えた。しかし、被災した漁船は多く、新たに発注してもいつ届くか分からない。「地元漁業者の窮状を救いたい」との一心で、兄弟から借金をして最低限の修理器具を買いそろえ、4月から漁港にキャンプ用テントを建てて修理業を再開した。

2人が修理する繊維強化プラスチック（FRP）の小型漁船は、定置網漁などの大型船と違い排水量は1㌧に満たない。だが、ウニやアワビ漁、ワカメ養殖など漁家の生計を支える重要な商売道具だ。

平田漁港　釜石港に隣接した釜石市管理の第1種漁港。ワカメやコンブ、ホタテの養殖が盛んだったが、津波で養殖施設と漁船の多くが流された。同市平田地区は92年の「三陸海の博覧会」の主会場となった。

平田漁港（釜　石）

再び海へ　船修理に力



「舫（もやい）」は、船と船とをつなぎ合わせることや、寄り合って一緒に仕事をすること、集落内の共同作業や利益の共同分配などを表す。沿岸地方では地域のつながりを示す「結（ゆい）」の意味で使われることも多い。

浜名さんが船体を補修し、前川さんが船外機を調達、取り付け。すでに30台以上を修理したが、引く手あまたで休み返上の作業が続く。前川さんは「船を直すことが、そのまま漁業復興の力になる」と気合を入れる。

2人とも現役の漁師とあって「以心伝心、かゆい所に手が届く修理」と周囲の信頼は厚い。漁業中谷地俊夫さん（58）の漁船「潤丸」（0・7㌧）も2人が手掛けた1隻。最終点検を終えた潤丸を前に中谷地さんは「立派に直してもらった。やっぱり漁師は船がないと始まらない」と感謝する。

依頼主や漁業者が集まり、世間話に花を咲かせる作業場のテント。浜名さんは「平田の海が好きだし、人が好き。みんなが笑顔で漁をできる日まで頑張る」と日焼けした顔をほころばせる。

いわて　東日本大震災

～被災地からのメッセージ～

町民第一の町政望む

大槌町大槌　金丸　健一さん（74）

津波が襲ってきた時は自宅にいたが、すぐ目の前を津波やがれきが通り、驚きや恐ろしさを感じていた。最近は若者の雇用の場を確保することや、一日も早くがれきの撤去をお願いし、町民を第一に考えてほしい。

さだまさしさんのコンサートが印象的。大勢の方の支援や大槌への訪問は本当にありがたい。新しい町長には、町民を第一の町政を望む。

仮設を出た後が心配

大槌町赤浜の仮設住宅で生活　古舘　武男さん（63）

2人で仮設住宅に暮らしている。妻の姉とおいは今も行方不明。何とか見つかってほしいと思いながら初盆を終えた。この先、何年仮設に住めるか分からず出た後のことが心配。津波を目の当たりにした妻は体調を崩しがちなので、恐怖心から同じ場所には住めないと思う。今後、どこに住むべきか分からない。

ボランティア支える

宮古市山口3丁目　宮古災害復興支援活動チームMAD監事　金野　侑さん（27）

行方不明になった田老の後輩が見つかるまではと4月からボランティアを続けている。7月中旬、仲間7人で市民団体M.ADを立ち上げ監事になった。市内外からやってくるボランティアの皆さんが気持ちよく力を発揮できるよう市社会福祉協議会と力を合わせている。古里の復興に役立ちたい。

～被災地へのメッセージ～

命への感謝を再認識

千葉県松戸市　守屋　太貴君（市立松戸高1年）

陸上部の合宿で一関市室根町を訪れた。震災をテレビで見て、自分の家だったらと思うと不安でたまらなかった。生きていることは当たり前ではなく、家族や仲間に支えられて生きていることがあらためて分かった。駅伝をさせてもらっていることへの感謝の気持ちを力に変えて、これからの走りで応えていきたい。

思い込め見守りたい

北上市黒岩　黒岩地区交流センター職員　小田島優子さん（23）

今月、初めて沿岸の被災地を訪れた。映像でしか見たことがなかったが、震災から5カ月たっても傷痕は生々しく衝撃を受けた。復興には時間がかかるが、亡くなった人の分まで、これから町がよくなっていくところを見てほしい。地元では20日に復興祈念の催しを開いた。思いを込め、復興を見守りたい。

希望掲げる塔　二つ目

「幸福の黄色いハンカチ」再現

山田監督　訪れ贈呈

菅野さん自作の隣に

陸前高田

山田洋次監督（右）から贈られた黄色いハンカチを手に、温かい心遣いに感謝する菅野啓佑さん＝陸前高田市

陸前高田市気仙町の菅野啓佑さん（69）が自宅跡地に設置した「幸福の黄色いハンカチ」の塔を21日、映画のメガホンを取った山田洋次監督が訪れ、もう一つ塔を贈った。自身のものと、山田監督から贈られた二つの塔を前に菅野さんは「この地区の元気印になる」と感激した。

菅野さんは5月、津波で流失した自宅跡地に「ここにも幸せが来るように」と願いを込めて、流れ着いた廃材を活用し、黄色いハンカチの塔を作った。

これに感銘を受けた山田監督が、菅野さんの塔の隣に今秋放送予定のドラマ「幸福の黄色いハンカチ」の撮影で使った塔を北海道羽幌町から移設。高さ約6㍍の柱のてっぺんから斜めに張ったロープにハンカチ38枚を掲げた。

現地を訪れた山田監督は菅野さんから震災当日の様子などを聞き、被害の大きさに驚いていた。

山田監督は「こんなふうにあの映画を見ていてくれた人がいて、映画をつくって良かった。陸前高田、三陸に暮らす人々の明日への希望の旗印になればいい」と語った。

山田監督から「希望よ永遠に」と書かれた黄色いハンカチを受け取った菅野さんは「映画が印象的で黄色いハンカチに希望を託した。山田監督が来てくれて言葉では言い表せない感動」と感謝した。

同日は、サンビレッジ高田で「幸福の―」の上映会も開かれた。

台町仲間また会えた

大船渡　5カ月ぶり住民集う

震災後の近況を報告し、絆を確かめ合う台町地区住民＝大船渡市

大船渡市大船渡町の台町地区住民が震災後初めて集まる「台町さいかい（再会・再開）」（実行委主催）は21日、同市の大船渡保育園で開かれ、5カ月ぶりの積もる話に花を咲かせた。

約200世帯の半数以上が被災し、4人が死亡、行方不明となった台町地区。仮設住宅に入居するなど地元を離れた住民も多い中、約120人が集まった。

久しぶりに顔を合わせた住民らは「生きてたかー」「今どこにいるの」など口々に声を掛け合った。話題は3月11日以降のことが中心。どうやって逃げたか、現在の暮らしは、今後どうするのか―。つらい話題に目頭を押さえながら語り合う姿も見られた。

震災後、同地区に避難してきた住民の自己紹介の場も設けられた。同じ大船渡町内の川原町地区から親戚を頼って夫婦で移り住んだ木下正弘さん（65）は「結束力が強く感心した。川原町に戻ったら防災対策など参考にしたい」と話していた。

実行委員長の金野広充さん（47）は「今日一番の効果は癒やし。話したくても話せなかったことを語り合いガス抜きできたと思う。台町だからできること」と胸を張った。

10月にも住民が集まる機会を設ける予定。

防災の取り組みが生きた避難体験を報告する斎藤真教諭（左）と釜石東中の生徒たち＝東京・有明

奇跡の避難　語り継いで

東京　釜石東中生が体験報告

【東京支社】釜石市の釜石東中（平野憲校長、生徒187人）の生徒代表は21日、東京・有明の東京臨海広域防災公園で開かれた防災フェア2011（内閣府主催）で震災体験を報告した。津波で校舎が3階まで浸水しながら全員無事で、「釜石の奇跡」と呼ばれる避難の様子を約200人の参加者に伝えた。

報告したのは紺野堅太君、柏崎楓さん（2年）、川崎杏樹さん、金野葵さん（3年）と斎藤真教諭。

震災当日、生徒たちは学校から約500㍍離れた場所に避難したが、「ここも危ない」という近所のお年寄りの助言でさらに高台へ。「長く生きている人の話には意味と価値がある」と感謝の気持ちを込めて振り返った。

同校は小中合同の避難訓練や、玄関に掲げる「安否札」を地域に配るなど防災教育が盛ん。「普段のことをしっかりしてこそ大事なときに力を出せる。奇跡は起こったのではなく皆で起こした」と強調した。

自分たちの経験を伝えることについて「語り継ぐことで救われる命がある。私たちの話を誰かに語ってほしい」と呼び掛けた。

久々の大会　球児熱く

大槌2スポ少、震災後初

久々の公式戦で、一投一打に大きな歓声が上がるおおつちスポ少と吉里吉里スポ少の試合＝大槌町

大槌町で震災後初の野球の公式戦となる県野球協会長旗争奪学童新人大会の地区予選が21日、同町大槌の大槌高グラウンドで行われた。震災直後は自衛隊の駐屯地に使われ、現在は仮設住宅や物資置き場となって試合ができない球場やグラウンドがほとんど。久々の試合に、子どもたちは懸命に白球を追い、グラウンドは熱気に包まれた。

おおつちスポ少と吉里吉里スポ少が対戦。震災前は3チームのスポ少が競っていたが、町内の練習場所がほとんどなく、2チームが合同して新チームを結成した。試合は新チームとして5月から活動を始めたおおつちスポ少が15―10で勝った。

同スポ少の長洞辰樹君（安渡小5年）は「練習はあまりできないが、仲間も増えて勝つことができた。県大会でも声をたくさん出して頑張りたい」と笑顔を見せた。

町野球協会の八木造一会長（74）は「何とかグラウンドを確保できた。震災直後は自衛隊の駐屯地に使われ、現在は仮設住宅や物資置き場となって試合ができない球場やグラウンドがほとんど。久々の公式戦ができた。活気があって良かったし、子どもたちが思う存分できるように少しずつ環境が整うよう努力したい」と拍手を送った。

田老の声　政府に届け

宮古でNPO　津川本部長と意見交換

津川祥吾岩手現地対策本部長（左奥）と意見交換するNPO田老の会員＝宮古市田老

宮古市のNPO法人立ち上がるぞ！宮古市田老（NPO田老）と、政府の東日本大震災復興対策本部の津川祥吾岩手現地対策本部長は21日、同市田老のグリーンピア三陸みやこ仮設住宅集会所で意見交換した。

津川本部長（左奥）と意見交換するNPO田老の会員＝宮古市田老

現地対策本部のメンバーやNPO田老の会員、山本正徳市長ら約30人が出席。会員からは「復興計画の中で、住宅地を確保するスピードを上げてほしい」「人口減を防ぎ雇用を確保するため、大規模なグループホームなどを建設する『高齢者特区』に田老を指定できないか」などの声が上がった。

また、被災後にボランティアに当たっている会員が「地元と本部をつなぐパイプがない。このままでは気持ちが折れてしまう」と涙ながらに訴えると、津川本部長は「NPOは被災者と接することが多く今後、重要な役割になる。地域の声を集めて届けてほしい」と述べた。

NPO田老は、地域の復興などを掲げて7月末に設立総会を開いたばかり。大棒秀一理事長は「田老の声を直接伝えられたことが大きな成果。さらに、住民からいろんな意見を集めたい」と意欲を燃やした。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。